

[特別活動]

望ましい人間関係を目指した学級集団の育成

- 社会的スキルの定着を目指した実践から -

村山 重樹*

1 目的

(1) はじめに

学校現場で社会的スキルが取り上げられることが多くなってきている。それは、社会的スキルの発達が未熟なことが原因で、友達とコミュニケーションが取れなかったり、トラブルを解決できなかったりして、いじめや不登校といった現象となって現れる場合が多いからであり、それを解消するために、社会的スキルを身に付ける教育が注目されてきたからである。

社会的スキルには様々な定義や研究があるが、ここでは学級集団の人間関係の育成に焦点を当てている河村茂雄¹⁾の研究を基にしている。河村は、「人とうまくかかわれない背景には『かかわり方』や『友人関係のもち方』についての共通したルールやマナーが少ないことがある」と指摘しており、「学級内で互いにかかわり合うためのルールがどの程度確立しているかを把握する必要性」を述べている。そのために、「学級生活で必要とされるソーシャルスキル尺度」を使った調査を提案している。この尺度は、学級生活を良好に送るためのスキルをまとめたものであり、ルールに関する個人の活用と学級の確立具合の目安となるのである。この尺度は2種類の下位尺度からなっており、「配慮のスキル」14項目と「かかわりのスキル」14項目で、個々の生徒と学級全体のスキル認知を把握するものである。

社会的スキルトレーニング（以下SSTと略記）では、山本五十六の「して見せて、言って聞かせて、させてみて、褒めてやらねば、人は動かじ」を指導の構えとする。トレーニングの流れとしては以下のとおりである。① インストラクション（重要性に気付かせながら言葉でスキルを教える）② モデリング（スキルの見本を見せて真似させる）③ リハーサル（頭の中や実際の行動で何度も繰り返す）④ フィードバック（やってみたことを褒めたり、修正して、やる気を高める）⑤ 定着化（練習したスキルを実際の場面で使えるようにする）の流れで行う。SSTの問題点としては、学級のリレーション（感情交流と役割意識のある人間関係）形成が低いと、生徒同士の参加意欲も低く、互いに牽制し合うので、トレーニングの効果が上がらない。そこで、構成的グループエンカウンター（以下SGEと略記）でリレーションの形成を図ることにする。SGEを計画的に実施し、その中にSSTを位置付ける。以上のことから、望ましい人間関係のある学級集団とは、リレーションを基に、適切なルールとマナーがある集団ととらえ、SGEでリレーションを育みつつ、SSTでルールやマナーを身に付ける活動を実践する。

田原²⁾の実践によると、グループワークを計画的に行うことにより、学年全体のスキルの平均値とタイプ別生徒数（配慮のしすぎや、かかわりすぎ等）に向上が見られた。しかし、細かい観点で、どのような変化が見られたのかについては明らかにされていなかった。例えば、配慮やかかわりの具体的スキルが、各活動でどのように取り入れられて、どの程度の数値変化があったのか、あるいは、リーダーや気になる生徒（配慮のしすぎやかかわりすぎタイプ）の変容などである。そこで、本研究では、前年度の校内研究の結果をふまえて取り組んだ1学期間の実践を、前述の観点で検証することで、取組の有効性を探っていくことにした。

(2) 生徒の実態

さて、当校では「だれもが居心地がよく、明るい雰囲気のある学級集団の育成」を目指して、2年計画で研究を進めてきた。昨年度は、河村が作成した社会的スキルアンケートを実施し、社会的スキルの認知や理解を把握した。さらに、開発したソフト³⁾を用いて、学級内における個々の分布を表すことで、視覚的にも捉えやすくした。それらの

* 新潟市立下山中学校

結果を学級経営案に盛り込んで、数値目標を設定し、「係活動を中心とした自主的な取組の推進」を目指した。

平成17年度はSSTやSGEを計画的に行った結果、係活動に関するスキル項目の数値が向上した。しかし、5月は配慮のスキル・かかわりのスキル共に平均値を上回ったものの(46.8・44.6)、12月には期待したほどの伸びが見られなかった(47.0・44.6)。しかも、2回ともにかかわりのスキルが配慮のスキルに比べて低く、かつ、同じ数値であった。原因については、能動的に級友とかかわるスキルトレーニングの不足があると考えた。また、小学校からの固定化した人間関係の中で、過剰に自己を防衛している生徒が多いからではないかと推測した。そこで、今年度は「望ましい人間関係づくりの工夫」に焦点を当てて、能動的に級友とかかわるスキルを高めるために、スキル項目を絞り込み、学級や抽出生徒の変容を見ることにより、取組の有効性について検証することができると考えた。

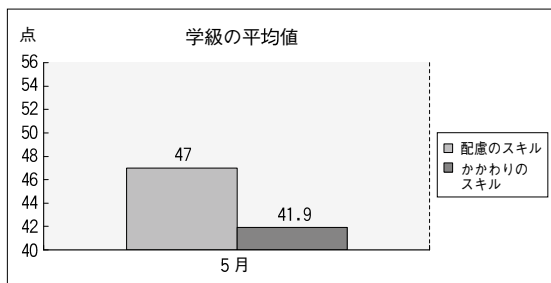
(3) 抽出学級の実態

1年生。女子17名と男子18名の計35名の学級である。出身小学校別に見ると、同一学区の小学校から33名、隣接学区の小学校から2名である。一小一中の学区のために、小学校からの人間関係を引きずってきている生徒もいる。

①第一回ソーシャルスキルアンケートの結果より(5月19日の帰りの会で実施。)

ア 配慮のスキルとかかわりのスキル平均値はどうなっているか

河村の尺度によれば、配慮のスキルもかかわりのスキルも平均的な学級の段階におさまってはいる。しかし、学級生活に高い満足感をもつ学級は、全体の平均値よりもかなり高い。そこを目指すとするれば、配慮のスキルに対してかかわりのスキル(能動的に級友とかかわるスキル)が低いように思える。そう言えば、4月当初から教師の指導を素直に受け入れて守ろうとするが、やや受身で、のびのびとした言動が少ない印象を受けた。つまり、周囲に遠慮して、自己主張ができずにいる生徒が多いように感じた。



イ 35名をタイプ別に分けると、どうなっているか。(下の表は河村のタイプ分けを基に作成した。タイプ名は村山が付けた)

タイプ名	配慮のスキル	かかわりのスキル	特徴
良好タイプ	高い	高い	学級内で仲間から慕われ、対人関係や集団活動へのかかわりが良好
平均的タイプ	平均的	平均的	平均的
配慮しすぎタイプ	高い	低い	周りから排除されることは少ないが友達を作れず本人はとてもストレスを感じている
かかわりすぎタイプ	低い	高い	相手の気持ちや状況を考えずに、自分の思いをぶつけてしまう
未熟タイプ	低い	低い	周りの子どもから好かれず浮かれてしまい、孤立する傾向が強い

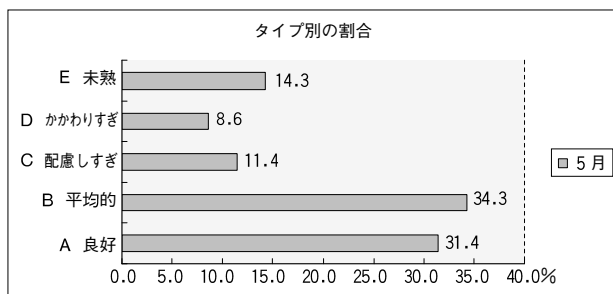
〈個人と学級のスキルレベル得点表〉

	配慮のスキル得点	かかわりのスキル得点
とても良好	52～56	51～56
良好	49～51	47～50
平均的	43～48	39～46
やや低い	39～42	35～38
かなり低い	～38	～34

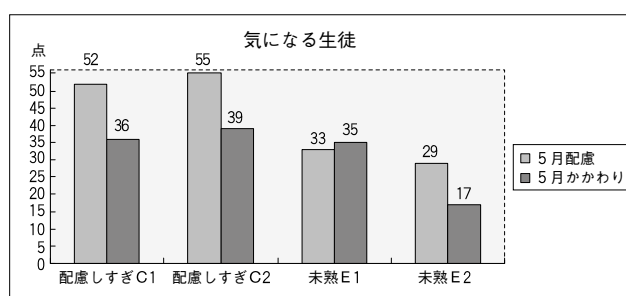
未熟タイプが5名、かかわりすぎタイプが3名、配慮しすぎタイプが4名。平均的タイプが12名、良好タイプが11名いる。平均的タイプの数値が上がることで、全体の数値も上がると予想した。

ウ 気になる生徒の数値はどうなっているか

配慮しすぎタイプと未熟タイプを4名抽出した。まず、未熟タイプには、暴力的な言動が目立つ生徒や、促音が



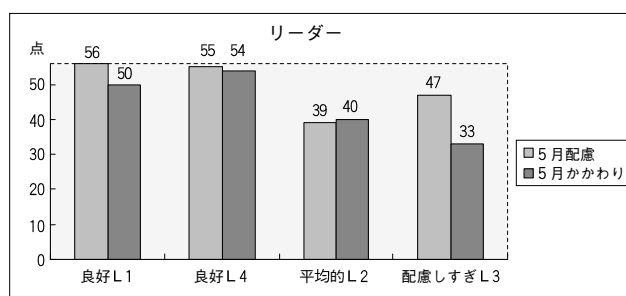
書けない等の学習のつまづきを抱えている生徒がいる。いずれの生徒もスキルに対する自己評価は低く、日ごろの言動からも自己肯定感の低さを感じた。これらの生徒には、特別活動や行事、日常の学校生活の中で、学級への帰属意識を高め、居場所があるという安心感をもたせてやりたい。そのために、仲間づくりのきっかけがもてる集団活動を活性化させていく必要がある。それらの活動を通して助けたり、励ましたりする生徒の数を増やしていきたい。



次に、配慮しすぎタイプには、真面目であるが、自己を主張したり、感情を素直に出したりすることが苦手な生徒がいる。そのうちの1名は友人に対して、「思ったことを言えなかったり、気持ちを聞いてもらえなかったり」という悩みをもち、度々、養護教諭やスクールカウンセラーに相談している。一時期、身体症状の訴もあった。相手に配慮しすぎて、積極的に自己主張ができずにストレスを抱えていると思われる。教育相談や生活ノートを活用しながら、心情に寄り添いながら対応していきたい。

エ リーダーの数値はどうなっているか

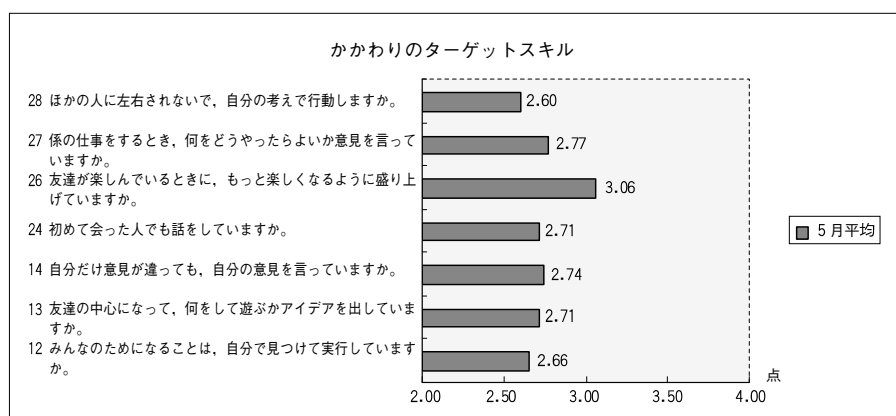
小学校からの引き継ぎの4名を抽出した。おおむね良好だが、学級委員1名が「配慮しすぎタイプ」となっている。「配慮のスキル」の高さに比べて、「かかわりのスキル」値が低いのである。担任の目からみても、公平で真面目ではあるが、積極的に集団に働きかけることを躊躇している様子が伺えた。リーダーとして孤立しないように、学級へのかかわり方を指導するとともに、成功体験を積ませて自信を付けさせたい。



オ ターゲットスキルはどうなっているか

合計点が100を切るスキル(35名が4評価だと合計140点)、あるいは平均が3評価前後の下位スキルからターゲットスキルとして7項目を選んだ。6～7月の活動で重点的に取り組み、推移をみることにした。

なお、数字には次の意味がある。4：いつもしている、3：ときどきしている、2：あまりしていない、1：ほとんどしていない、である。



(4) 研究仮説

以上のことから次の研究仮説を設定して、取り組むことにした。

級友と能動的にかかわるSSTやSGEを推進すれば、かかわりのスキル値が向上し、望ましい人間関係が高まる。

2 方法

- (1) 被験者 中学生1年抽出学級 35名(この論考では1学級のみ、校内研究では全校生徒414名)
- (2) 時期 2006年5月19日(金)、2006年7月14日(金)(校内研究では、2007年1月31日(水)にも実施の予定)
- (3) 測定尺度 ソーシャルスキル尺度は、河村茂雄「育てるカウンセリングシリーズ3 グループ体験によるタイプ別!学級育成プログラム中学校編」図書文化、2001、pp81～87を用いた。

3 実践

実践については、4～5月分については割愛し、アンケート実施後の6～7月の実践に的を絞って載せることにした。

	学級の様子や課題	活動内容と取り組みの様子	ターゲットスキル
6月16日 金	学級活動の時間 2回目の班編成を行い、新たな気持ちで生活班を過ごしている。 学級全体は4月当初に比べて、だいぶうちとけてきているが、自分の気持ちや考えを話したり、人の気持ちや考えを聞いたりしながら、互いの理解を深める活動が少ないように思える。 教育実習生を迎え、生徒は喜んでいて。担任とは違う関係性で、SGEに取り組むチャンスととらえた。	「スゴロクで自分を語ろう、友を知ろう」 自己や友達のことを発見し、協力することで、友達や教師との絆を強めるために行った。班ごとにスゴロクゲームを行い、マスで出題されているテーマについて話をする。できるだけ詳しく話し、感想を話し合う。 教育実習生の人柄や、手作りのスゴロクのおかげで、とても和やかな雰囲気での活動できた。活動後の振り返りシートでは、全員が楽しかった、またやりたいという感想が書いてあった。やはり、楽しさがコミュニケーションを促進すると実感した。	○友達の間話な話はひやかさずに聞くことができる(配慮のスキル) ○友達が話しているときは、その話を最後まで聞くことができる(配慮のスキル) ○みんなと同じくらい話をする事ができる(かかわりのスキル) ○相手に聞こえるような声で話すことができる(かかわりのスキル) ○おもしろいときは、声を出して笑うことができる(かかわりのスキル)
			抽出生E1(未熟タイプ)の感想 「おもしろかった。けど、自分のことを話すのが面倒くさかったし、恥ずかしかった」
6月23日 金	学級活動の時間 中学校生活にも慣れてきた。小学校からの人間関係が少しずつ変化するとともに、何気ない言動で人間関係を狭めている生徒もいる。ここでは、3つのタイプのあいさつを通して、そこから受ける印象を意識させることによって、あいさつの大切さを感じ取らせたい。そこから、何気ない一言や行動によって、人間関係を広めたり、狭めたりすることを体験的に学習させたい。 〈事前アンケートの結果〉 「学級の友達に対するあいさつについては、」 A自分から進んでする 14人 B言われてからする 19人 C言われてもしないことが多い 2人 D言われてもほとんどしない 0人	「3タイプのこんにちは」 あいさつのタイプによって感じ方が違うことを体験し、何気ない言動が人間関係に影響を与えることを体験的に学習する。 ・活動には、おおむね楽しくとくんでいたが、男子と女子が半々に分かれる場面もあったので、十分に交流したとは言えない。また、5名が「あまりやりたくない」と答えていた。 〈事後アンケートの結果〉 ○楽しく取組めたか はい 31人、だいたい 4人 ○素直に自分の思っていることを表現できたか はい21人、だいたい10人、あまり 4人 ○自分の気持ちや考えをまとめたりする場面がありましたか はい10人、だいたい18人、あまり 3人、いいえ 3人 ○友達の気持ちを考えたり、受け入れたりする場がありましたか はい15人、だいたい16人、あまり 3人、いいえ 1人 ○また、このような活動をやりたいですか はい16人、だいたい15人、あまり 3人、いいえ 2人	〈事後アンケートの結果〉 ○みんなと同じくらいにあいさつができたか。(かかわりのスキル) はい 29人 だいたい 5人 あまり 1人 いいえ 0人 ○他の人に左右されないうで、自分で考えて行動できたか。(かかわりのスキル) はい 13人 だいたい 17人 あまり 4人 いいえ 1人 ○日ごろは交友がない人でもあいさつができたか。(かかわりのスキル) はい 15人 だいたい 14人 あまり 5人 いいえ 1人
			抽出生E1(未熟タイプ)の感想 「ほくはエクササイズ1のときは、しかとするのが大変だったけど、エクササイズ2のときは、さわやかにあいさつできたので、すっきりしました」「(これからは)明るく、あいさつをしたいです」
6月28日 水	帰りの会 5月くらいから、特定の生徒が私語や立ち歩きをする教科が幾つか出てきた。それが、テストも終わり、暑くなるにつれて目立ってきた。教科担任の指導には素直に応えようとするが、生徒同士で注意し合う場面はほとんど見られなかった。	授業態度の振り返りを、学習係が始める。 21日から28日までの間、校内生活委員が、学習規律向上のために、授業準備や態度の見直し活動を行ってきた。校内生活委員が、学級全体に注意したり、呼びかけたりして、授業後に担当教諭から評価を受ける。その結果を帰りの会で、報告し、学級全体で改善点に取り組むものである。成果が見られた教科もあったが、課題としては期間が短いために、意識が定着しづらいし、実践に結び付きにくいことと、校内生活委員任せのために、一人ひとりの自覚が高まりにくいことが挙げられる。 しかし、各学習係が担当することになり、責任をもちなければならない生徒が増えたために全体の意識も高まってきたようだ。ただし、仲間同士で注意をしたり、呼びかけたりすることは課題として残った。けれども、帰りの会で呼びかけることを恥ずかしがっていた生徒が、拍手と返事で受け止められることで、自信をもって発表できるようになってきており、よい雰囲気が出てきた。	○友達の間話な話は、ひやかさずに聞くことができる。(配慮のスキル) ○自分の係の仕事は、最後までやりとげることができる。(配慮のスキル) ○係の仕事をするときに、何をどうやったらよいか意見を言うことができる。(かかわりのスキル)

7月 学級活動の時間	<p>ソーシャルスキルアンケートの結果は、配慮のスキル、かかわりのスキル共に数値が伸びた。配慮は49.6点で平均的から良好段階になった。かかわりのスキルは41.9点から44.6点で、2.7ポイント増えたものの、平均的なクラスの段階に留まっている。より、能動的にかかわるためには、互いの良さをよく知り、その良さを認め合う関係を高める活動を取組むことが必要である。そこで、1学期のまとめとして、5月に行った「ともだちの良いところ探し」と同じ内容の「級友の良いところを見つけて、メッセージを贈ろう」という活動を行った。</p>	<p>「級友の良いところを見つけて、メッセージを贈ろう」 1学期を振り返って、級友の良さを振り返り、お互いを認め合う活動を行った。A4の用紙に35名分のメッセージを書いて、印刷し配布した。短時間内で、的確な言葉を選択することが難しい課題である。しかし、家に持ち帰り、全員が仕上げ、提出した。提出物が集まったのは久しぶりのことだった。印刷物が配られるたびに、肯定的な感想を口にするものが多かった。しかし、文章については、着目する視点や、単語の選択など、画一的なものが多かった。今後も具体的に指導していきたい。</p>	<p>・相手の立場になって、単語や文を考えること。選択する単語は、肯定的な単語を選択すること。(配慮・かかわりのスキル)</p>
<p>抽出生E1(未熟タイプ)の記述 ○級友から、以下のメッセージをもらい、嬉しそうであった。 「雰囲気盛り上げてくれる」9人、「無邪気でおもしろい」8人、「思ったことを発言できる」6人 「明るくしてくれる」6人「いつでも元気」3人、「親しみやすい」1人、「すごく素直」1人 「話し相手になってくれる」1人 ○級友へあてたメッセージは以下のとおり。 「優しい」10人、「おもしろい」6人、「字がうまい」5人、「楽しい」4人 「かっこいい」3人、「明るい」1人、「椅子をとってくれてありがとう」1人 「いつも優しくしてくれてありがとう」1人、「写真くれてありがとう」1人 「拾ってくれてありがとう」1人、「消しゴム貸してくれてありがとう」1人</p>			

4 結果

第2回ソーシャルスキルアンケートの結果、「学級全体の推移」を見ると、配慮のスキルは2.5ポイント、かかわりのスキルは2.6ポイント上がった。配慮のスキルは平均的レベルから良好レベルとなった。あと2.5ポイント上げて、「とても良好レベル」に到達させたい。かかわりのスキルはあと1.5ポイント上げて、良好レベルに到達させたい。

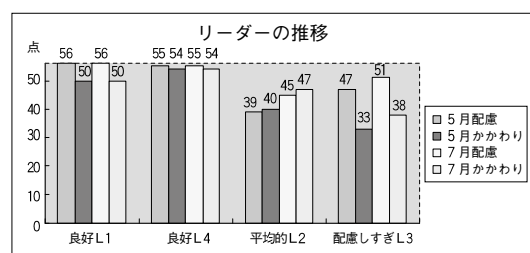
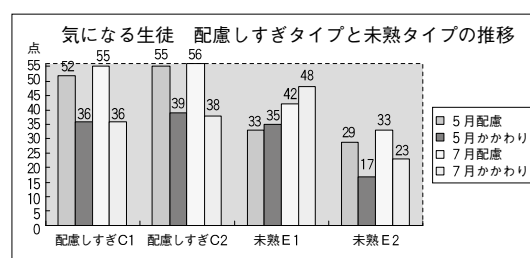
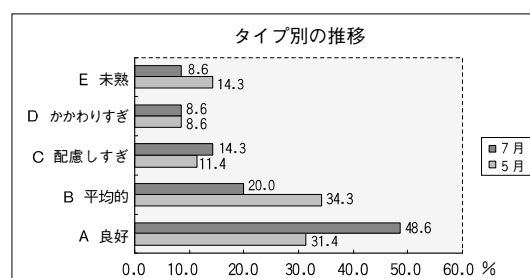
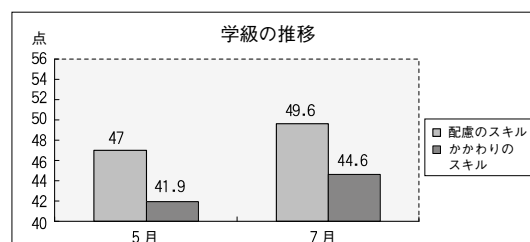
「タイプ別の推移」を見ると、良好タイプが学級の半分近くまで増えてきた。また、未熟タイプが減ってきたのはよい傾向である。しかし、配慮しすぎタイプは増えている。このタイプの生徒のかかわりのスキル値を伸ばす必要がある。

「気になる生徒の推移」を見ると、やはり、配慮しすぎタイプのかかわりのスキル値が伸びていない。スキル項目だと「自分だけ意見が違って、自分の意見を言う」「友達を楽しんでいるときに、もっと盛り上げる」等である。自己主張に関するスキルアップが課題と言える。

未熟タイプの数値は、E1もE2も伸びている。E1は「かかわりすぎタイプ」となった。居場所はできたようだが、相手の気持ちや状況を考えたSSTを強化する必要がある。E2のタイプは変わらなかった。成功体験を積ませて、肯定的な評価を即時に行い、自信を付けさせたい。行事などで活躍する場面を逃さずに取り上げていきたい。

「リーダーの推移」は全体的にはよい傾向である。心配した「配慮しすぎタイプ」のL3は「かかわりのスキル」が5ポイント増えた。あと1ポイント増えると「配慮しすぎタイプ」でなくなるので、行事にからめて、スキルを伸ばしていきたい。

「かかわりのターゲットスキル」は全項目の数値が増えた。ただし、平均値3に到達しない項目が2項目あった。「友達を中心に、何をして遊ぶかアイデアを出していますか」「みんなのためになることは、自分で見つけて実行していますか」であ



り、課題である。また、伸び率を見ると、一番高いのは28番のスキル「ほかの人に左右されないで、自分の考えで行動しますか」。逆に、伸び率が一番低いのは26番のスキル「友達を楽しんでいるときに、もっと楽しくなるように盛り上げていますか」であった。

5 考察と今後の課題

今回は、主に3時間の学級活動とスキル数値との関係を見てきたが、ターゲットスキル値が全て増えており、望ましい人間関係が徐々に作られていると考えられる。また、未熟タイプの抽出生E1の数値が上がり、学級に居場所が確保できたことは成果であった。しかし、取組とスキル値の相関関係が見えてはきたが、強い相関関係かどうかは断定できなかった。むしろ、SSTやSGE以外の様々な働きか

けに効果がありそうである。例えば、あいさつに関するスキルは、生徒会のあいさつ運動や部活動指導が大きく影響している。当校の生徒は、登下校だけでなく、昼間の廊下ですれ違うたびに「こんにちは」とあいさつを交わしており、学校全体で働きかけた成果と言える。加えて、学校外部の地域や保護者の方から褒められたことの効果も見逃せない。今後は多様な視点から相関関係を検証していく必要がある。

さて、2学期の課題は、配慮のしすぎタイプのかかわりのスキル値を伸ばすことである。特に、自己主張に関する「自分だけ意見が違って自分の意見を言う」「ほかの人に左右されないで自分の考えで行動する」スキルである。「社会的スキルの心理学」によれば、「自己主張とは社会や文化によって規定されており、スキルの分類もいろいろであるが、『対人的な積極性』という観点で大きく見ることができる」としている。対人的な積極性には肯定的なものとの否定的な2種類がある。肯定的なものは「相手の欠点を大目に見たり、話しかけられたらそれを続けたり、嬉しかったら少し大げさにそれを表現したりする」であり、否定的なものは「相手とは別の意見であることをハッキリいうし、理由のない要求はキチンと断る」などであり、後者が不足していると思われる。そこで、2学期には対人的な積極性を伸ばすために、否定的な自己主張のスキルトレーニングに取り組む予定である。

引用・参考文献

- 1) 河村茂雄 「育てるカウンセリングシリーズ3 グループ体験によるタイプ別！学級育成プログラム中学校編」 図書文化、2001
- 2) 田原朋子「望ましい人間関係とルールマナーの定着を目指した学級集団の育成」、上越教育大学学校教育総合研究センター編 『教育実践研究第16集』 2006、pp131～136
- 3) 山内伸二教諭作成（今年度は新潟市立白新中学校に勤務）
 - ・吉澤克彦・津村誠 編著 「エンカウンターで学級づくり12ヶ月 中学校1年」 明治図書、2006
 - ・相川 充 「人づきあいの技術 社会的スキルの心理学」 サイエンス社、2000
 - ・菊池章夫・堀毛一也 編著 「社会的スキルの心理学」 川島書店、1994

